（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　時田　郁子

本論文は、20 世紀ドイツ語圏文学を代表する一人、オーストリアの作家ローベルト・ムージル（1880-1942）の未完の長編小説『特性のない男』をとりあげ、その主題および詩法を、ひとつの「詩的人間学」と捉えて、論じたものである。

『特性のない男』の執筆は、主に 1920 年代になってのことであるが、前身となる草稿群では、主人公の名前も変転した。そこに主題の明確化の表現を見る本論文は、主要モチーフの一つ「別の状態」へ繋がる「別様に」という語を響かせるAnders を退けて選ばれたUlrich には、〈原-我〉Ur-Ichの概念が隠されており、〈我〉の解体と〈原-我〉への再構築が主題として暗示されている、として、全篇を解釈してゆく。そのさい採用された方法は、作者ムージルの博士論文の対象でもあったエルンスト・マッハの要素還元主義をはじめとする、19 世紀後半以来の人間論（ないしその基礎となるもの）の参照とならんで、とりわけ小説テクストに見られる詩法の分析である。

近代的「個」の人間論に代わる新たな人間論ないし「新しい人間」像が模索された時代の中、ムージルは、カバラの原アダム、ギリシアのヘルマフロディトス、エジプトの兄妹=夫婦神オシリスとイシスなど両性具有ないし両性一体の原形象を参照しつつ、ウルリヒとアガーテの兄妹を「シャム双生児」との自己規定に至らせて、両者の区別と一体性、両性の異質性と同根性を包む〈原-我〉の経験をさせる、と本論文は読む。また、その関連で、要所要所に現れる樹木の形象に注目し、複雑なこの小説の構成と詩法に新たな光を当てる。即ち、両性の対置は（合理主義を含む）〈暴力〉と（神秘主義に繋がる）〈愛〉の原理的対置と重ねられ、両原理は、〈暴力の樹〉と〈愛の樹〉として形象化された上で、究極的には、根源的な〈生命の樹〉の分枝という位置づけを得る、と論じ、主人公が出会う出来事、旧友、特異な存在感をもつ殺人者モースブルッガー、そして女性たちは、部分的に彼とも鏡像関係や対照関係に立ちながら、この 2 本に分かれた〈樹〉に連なるものである、と指摘する。こうして〈原-我〉は「エデンの園」の〈生命の樹〉への到達を含意することになる。そしてこの「葉に覆われて見えにくい」樹幹を垣間見せるのが、要所に置かれた樹木のイメージとともに、両原理の標徴となる単語群の周到な配置であり、「魂の滑りゆく論理」と呼ばれる独自の比喩法を伴うそのような詩法が、語り難い〈原-我〉とそこへの道を間接的に浮かび上がらせ、「詩的人間学」を提示している、と説く。

本論文は、第 1 次大戦へ向かう時代設定への論及の不十分さや翻訳等に時に見られる不正確さに憾みを残すものの、参考文献博捜の上、作品全体の解釈に関わる新たな視点を提示し、多岐に亘る論点を一貫した論へと構成した力量は、十分評価すべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。